「恋文」

概要：マスターが悪ふざけで書いた恋文を貴族が真に受けちゃったのさ！

ハンドアウト

依頼主：貴族

カバンの整理をしていたら、身に覚えのない恋文が紛れていた。差出人はフィアーナという女性で、身分違いの愛を告白する内容だった。邪険にするわけにもいかないので、送り主を探してほしい。

初期証拠カード「恋文」について

商人「マスターに聞いてみれば分かるかもね(笑いを噛み殺しながら)」

**証拠カード「マスターがなにか知っている」を渡して下さい。**

学者「差出人の名前はギリシア人の女性によくある名前だね、関係があるかは知らないが」

記者「コレと同じ内容の恋文が出てくる小説を以前マスターに読ませてもらったことがあるね。たしか身分違いの恋をテーマにした作品だった気がするよ」

**証拠カード「恋文の出てくる小説」を渡して下さい。**

マスター「何も知らないぞ(焦りつつ)」

貴族「何か進展はあったか？」

靴磨き「知りませんね」

証拠カード「マスターがなにか知っている」について

マスター「なっ何も知らないといっているだろう」

他「私に言われましても……」

注)これ単体では何も手がかりが出ません。

証拠カード「恋文の出てくる小説」について(「マスターがなにか知っている」と共に出た場合)

商人「そこまで知っているなら教えてあげますが、実はラブレターを書いたのはマスターなんですよ。詳しいことは書いた本人に聞いてみな」

**証拠カード「マスターの冗談」を渡して下さい。**

マスター「確かに前にそんな小説を読んだが、なにか？(焦りながら)」

他「私に言われましても……」

証拠カード「マスターの冗談」について

マスター「全く、商人には口止めをしておいたのに……そうです私があの恋文を書き、貴

族さんに渡しましたが酒の席だったのでまさか真に受けるとは思わなかったのです。貴族さんに謝っといてもらえますか」

**真相カード「酒の席の冗談」を渡して下さい。**

貴族「そうだったのか、しかし何故そんなことをしたのか気になるな」←マスターに誘導して下さい。

他「私に言われましても……」

「チェンジリング」

概要：舞台女優のカバンと入れ替わっていたのさ！

ハンドアウト

依頼主：町人

カバンがよく似た別のカバンと入れ替わってしまった。なかにはいくつかの小物と読めない言語で

書かれた本が入っている。自分もだが、相手も困っているだろう。返してはくれないだろうか？

初期証拠カード「読めない本」について

学者「おそらくラテン語だね、読める部分を訳してみたが何かの演劇の台本のようだ。記者が新聞に劇の特集記事を載せていたからなにか知っているかもしれないね」

**証拠カード「一部訳の台本」を渡して下さい。**

他「読めないから判断のしようがないね……学者さんなら読めるかもしれないが」←学者に誘導して下さい。

証拠カード「一部訳の台本」について

記者「ああこれならこの前取材したオペラの台本で間違い無いだろうね。持ち主？確か貴族さんの父親がオペラのスポンサーをしていたから話を聞いてみればいいんじゃないかな」

**証拠カード「スポンサー」を渡して下さい。**

貴族「オペラなら父上が熱を上げていたようだが詳しいことまではわからないな」

他「劇？それなら記者さんが特集記事を書いていたような……」←記者への誘導をお願いします。

証拠カード「スポンサー」について

貴族「そうか、それなら父親に渡してもらうように言っておくよ」

**真相カード「あるべきところへ」を渡して下さい。**

他「貴族さんの所へ行ったほうがいいのでは……」←貴族への誘導をお願いします。